

(独立行政法人教職員支援機構委嘱事業)

教員の資質向上のための研修プログラム開発支援事業報告書

プログラム名	教職大学院のコンサルテーション機能とシンクタンク機能を活用した学校サポートプロジェクト
プログラムの特徴	本プログラムでは、教職大学院のコンサルテーション機能とシンクタンク機能を活用し、「学びづくり」「生徒指導」「校務校内研修」「小中一貫教育」の四つのプロジェクトを行う。各プロジェクトは、教職大学院の教員が中心となり、特定の学校や地域に出向き、その学校や地域と協働して、学校をよりよくするために、継続的な教員研修や校内支援を行うことで、各学校の課題解決をサポートする取組である。

平成31年3月

機関名 鹿児島大学教職大学院

連携先 鹿児島県教育委員会、鹿児島市教育委員会、日置市教育委員会、いちき串木野市教育委員会、薩摩川内市教育委員会、南さつま市教育委員会、南九州市教育委員会

鹿児島市立宮小学校、鹿児島市立吉野東小学校、日置市立妙円寺小学校、日置市立湯田小学校、いちき串木野市立市来小学校、薩摩川内市立東郷小学校、薩摩川内市立東郷中学校、南さつま市立加世田中学校、南九州市立別府中学校

プログラムの全体概要

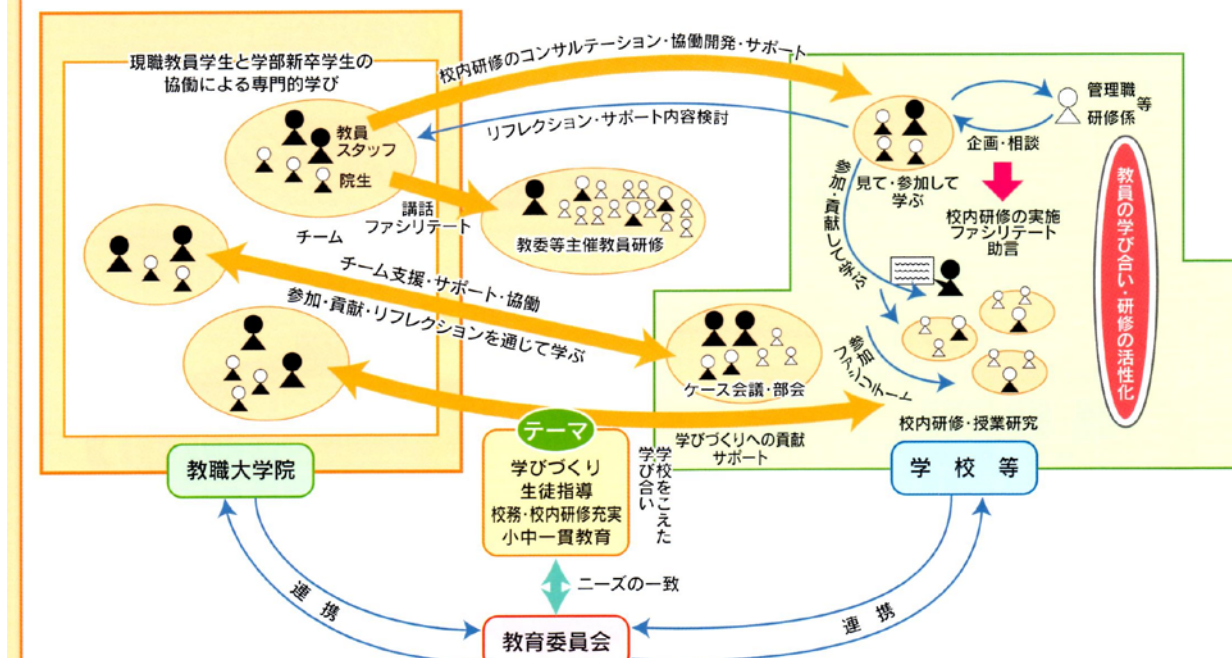
教職大学院のコンサルテーション機能とシンクタンク機能を活用した学校サポートプロジェクト

各学校は、自校の教育課題を解決し、教職員の資質向上を図るため、年間研修計画をもとに、教職員研修を実施している。しかし、各学校は、自校の研修ニーズに対して、十分な質と量の研修を実施できているとは言えない現状がある。そこで、本プログラムでは、校内研修等のコンサルテーションや研修の共同開発を希望する教育委員会や学校の・サポートを教職大学院が行い、校内研修等の資の向上を図る企画である。

具体的には、教職大学院のスタッフが、連携校と日程調整を行い、継続的に学校と関わり、研修や授業研究の企画や実施に関わるだけでなく、そこに教職大学院の院生が同行して、実施される校内研修のファシリテーションや助言を参観したり関与したりする実習機会を提供した。このプログラムを通して、学校は、教員の学びあいや研修の活性化を図ることができ、院生、特に現職教員学生は、現任校の研修活性化のヒントを得ることができた。

今後は、教職大学院と教育委員会、学校の協働による校内研修の質の向上方策について各プロジェクトで得られた知見をもとにまとめ、他の学校にも適用可能な研修プログラムとして洗練させていくことを目指したい。

サポートプロジェクトのイメージ



1 開発の目的・方法・組織

① 開発の目的

教員の資質向上のための研修企画は、鹿児島県内の市町村教育委員会や各学校が上部組織からの方針に基づき目標を立て計画や実施がなされてきたが、大学等の外部組織からの専門的な知見やノウハウの支援が必ずしも十分ではないと言える。そこで、本事業では、これまでの研修プログラムの実績をもとに鹿児島県教育委員会と連携し、教職大学院がもつコンサルテーション機能およびシンクタンク機能を活用し、鹿児島県内の教育委員会や学校が企画する教員研修を持続的にかつ多方面から支援していく研修プログラムを開発することを目的とし、これを「学校サポートプロジェクト」と称し、実施することとした。

② 開発の方法

本学教職大学院が、鹿児島県教育委員会の協力のもと、連携協定を結んでいる9市町村教育委員会に依頼して、本研修プログラム開発に協力してもらえる学校等のエントリーを求めた。依頼にあたっては、各学校等に研修プログラム開発のイメージをもってもらえるよう、昨年度の開発事業をもとにしたパンフレットを作成した。

本研修プログラムでは、4つの研修プロジェクトを提示した。各プロジェクトは、それぞれ教職大学院の専門スタッフがリーダーとなって進め、エントリーしてきた学校等は、応募内容から選抜された。

プログラム開発にあたっては、教職大学院組織の中に委員会（学校サポートプロジェクト委員会）を作り、進め方や進捗状況の共有を図った。また、4つのプロジェクトはそれぞれ、プロジェクトリーダーを中心に、校内研修等の支援や協働の仕方、院生の関与について、連携校と継続的な協議を行った。さらに、連携校及び教育委員会とは、2度にわたって本学にて連携協議会を開催し、進捗状況等の情報共有を図った。

③ 開発組織

No	所属・職名	氏名	担当・役割	備考
	【鹿児島大学教職大学院】			
1	教育学部長・研究科長	上谷順三郎	委員長	
2	教授（専攻長）	有倉 巳幸	事務局長	生徒指導
3	准教授	廣瀬 真琴	事務局	校務・校内研修充実
4	教授	假屋園 昭彦	研究委員	学びづくり
5	〃	溝口 和宏	〃	〃
6	〃	海江田 修誠	〃	実務家教員
7	〃	原之園 哲哉	〃	〃
8	〃	迫田 孝志	〃	〃
9	准教授	山口 幸彦	〃	〃
10	〃	原田 義則	〃	小中一貫教育
11	〃	山本 朋弘	〃	学びづくり
12	〃	関山 徹	〃	生徒指導
13	〃	高谷 哲也	〃	校務・校内研修充実
14	〃	奥山 茂樹	〃	実務家教員
15	〃	下古立 浩	〃	〃
16	〃	山元 卓也	〃	〃
	【県教育委員会】			
17	県教育庁義務教育課課長 同課企画生徒指導係係長	山本 悟 林 耕二	副委員長 連携協議会委員	

18	【県総合教育センター】 企画課長	脇坂 郁文	〃	
19	【鹿児島市教育委員会】 学校教育課長	下江 嘉誉	連携協議会委員	
20	【日置市教育委員会】 学校教育課長	豊永 藤浩	〃	
21	【いちき串木野市教育委員会】 学校教育課長	大迫 輝久	〃	
22	【薩摩川内市教育委員会】 学校教育課長	熊野 賢一	〃	
23	【南さつま市教育委員会】 学校教育課長	東 浩一	〃	
24	【南九州市教育委員会】 学校教育課長	田辺 源裕	〃	
	【各学校】			
25	鹿児島市立宮小学校校長	寺地 光博	〃	
26	鹿児島市立吉野東小学校校長	原口 健児	〃	
27	日置市立妙円寺小学校校長	田中 幸太郎	〃	
28	日置市立湯田小学校校長	下脇 徹	〃	
29	いちき串木野市立市来小学校校長	市園 誠	〃	
30	薩摩川内市立東郷小学校校長	森菌 智子	〃	
31	薩摩川内市立東郷中学校校長	三戸瀬 智	〃	
32	南さつま市加世田中学校校長	田宮 弘宣	〃	
33	南九州市立別府中学校校長	中村 順人	〃	

2 開発の実際とその成果

他教職大学院の視察

○上越教育大学 訪問報告

期 日 平成30年12月20日(木) 10:00~12:00

訪問者 溝口、山口、海江田(記録)

場 所 上越教育大学本部応接室

応対者 梅野正信(理事兼副学長) 林泰成(教務担当副学長) 廣瀬裕一(専攻長)
平野忠(経営企画課長) 他

訪問先の上越教育大学では、事前に送付した質問事項に沿って、詳細な説明を受けた。「学校支援プロジェクト」については、2年間で300時間(各学年150時間)の実習で、9月~12月に週1回ペースで学校を訪問していること、前期に講義を集中させ、後期は実習に集中できるカリキュラム編成になっていること、別途、必修科目として「学校支援リフレクション」、「学校支援プレゼンテーション」を設けて、省察やまとめを行わせていることが説明された。また、連携校の要望、教員の専門性、院生のニーズをマッチングさせるための決定手続きや、院生のプロジェクトにおけるチーム編成や指導方針につい

でも詳細な説明を受けることができた。

「修了生へのフォローアップ」については、フォローアップ研修会セミナーを年1回、これまでに9回実施していること、土曜日に、記念講演、修了生発表2人、修了生の近況報告、情報交換会などの内容で実施していること、6回までは研究会の冊子を作っていたが、7回以降はHPに掲載しているとのことであった。

「学生募集」については、企画担当広報より、入試説明会を大学と東京で実施し、個別相談会については東京（10回）と名古屋（1回）で行っていること、パンフレットでは伝わらない部分もあり、相談会には意義があること、さらに大学として32大学と連携協定を結んで学生確保に努めていることなどの説明を受けた。

この他、「学生への奨学金」について名簿登載者授業料半額免除制度や教育訓練給付金について説明を受けるとともに「認証評価」「改組計画」についても貴重な情報を提供頂いた。

学校サポートプロジェクトの取組概要

① 学びづくりサポートプロジェクト

○研修の背景やねらい

文科省等から委託を受けて実施している研究指定校での各教科等の研究には基本的に学校が研究推進チームを作り企画・運営している。しかし、学校全体で取り組む際にどうしても外部のリソースが十分でなく、そのため、教育委員会の指導助言や自校及び他校の前例等を踏まえて推進しているのが現状である。その外部リソースとして、教職大学院の専門スタッフが継続的に関与することで、学校内だけでは気づけなかった視点や観点をもって研究を推進してもらうことがねらいである。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

学びづくり（道徳）

対象：南さつま市加世田中学校（＋南さつま市加世田小学校）の教職員、鹿児島大学教職大学院院生

人数：約40名（教職大学院院生5名を含む）

期間：平成30年6月～10月（全4回）

概要：

第1回 加世田中学校校内職員研修「道徳研究授業及び授業研究」

日時 平成30年6月4日（月）14:50～16:45

場所 南さつま市立加世田中学校

内容

・研究授業 3年道徳 主題名「仲間とともに」（14:50～15:40）

学習指導要領の内容項目：C-15 よりよい学校生活，集団活動の充実

・授業研究（16:05～16:45）

授業反省，質疑応答，研究協議，指導助言（鹿児島大学教職大学院迫田孝志教授），講評（加世田中学校 田宮弘宣校長）

第2回 加世田中学校校内職員研修「指導案検討会」

日時 平成30年8月1日（水）11:05～14:30

場所 南さつま市立加世田中学校

内容

・指導案検討1回目（11:05～12:15）

授業者が準備した検討資料（授業プラン）を，各学年部で検討

指導助言（鹿児島大学教職大学院迫田孝志教授）

・指導案検討2回目（13:30～14:30）

午前中の検討をもとに、再検討。講評（加世田中学校 田宮弘宣校長）

第3回 加世田中学校公開研究会

日時 平成30年10月10日（水）13:20～16:40

場所 南さつま市立加世田中学校

内容

- ・開会行事と研究発表（13:20～13:50）
- ・公開授業（14:00～14:50）
- ・分科会（15:00～16:00）
- ・指導講話（鹿児島大学教職大学院假屋園昭彦教授）（16:10～16:35）
- ・閉会行事（16:35～16:40）

第4回 南薩地区道徳教育研究会

日時 平成30年10月30日（火）13:55～16:40

場所 南さつま市立加世田小学校

内容

- ・開会行事と研究発表（13:55～14:15）
- ・公開授業（14:20～15:05）
- ・分科会（15:15～15:55）
- ・指導講話（鹿児島大学教職大学院假屋園昭彦教授）（16:05～16:35）
- ・閉会行事（16:35～16:40）

学びづくり（国語）

対象：鹿児島市立宮小学校の教職員、鹿児島大学教職大学院院生

人数：約20名（教職大学院院生5名を含む）

期間：平成30年5月～平成31年2月（全12回）

概要：鹿児島市教育委員会指定校（国語科・1年目）として、宮小学校が全校態勢でどのように研究開発していくのかについて、実習を通じた研修を行うことを目的とし、校内研修会・研究授業・終日の授業参観等を通して、校内研修の運営や各学年における共通実践事項の浸透の様子、子供の変容等について観察・検証しながら、宮小学校における教児一体となった学びの実現及び管理職のリーダーシップについて研修を深めた。

② 校務・校内研修充実サポートプロジェクト

○研修の背景やねらい

校務・校内研修充実サポートプロジェクトでは、校内研修や授業研究の充実・活性化を目指して取り組む学校を対象に、教職大学院スタッフが研修の企画・運営・実施の支援を行った。また、教職大学院の実習としては、教職大学院スタッフの校内研修支援の営みに同行し、実際の営みに参画することを通して、学校における組織運営ならびに組織学習の実現方法についての理論的・実践的な学びを深めることをねらいとした。

<サポートの基本方針>

① 各学校の研究目的、背景、課題、方針に応じた支援を実施する

- ・学校の主体的な校内研修充実の取り組みをどのように支援することが可能かを協働で考える

② 各学校の取り組みがサポート終了後も持続・発展するために必要な「考え方」の定着を主

に支援する

・方法は状況に合わせて常に改変・開発していくべきであるため、方法を開発する際の基盤となる考え方を共有・定着できるよう支援を行う

③ 取り組みの専門的な価値付け・意義づけを重視する

・各学校の取り組みに対する専門的裏付けによる企画の後押しと、取り組み結果に対する専門的な価値付け、意義づけによる成果実感の拡大を担う

<実習における学びの方針>

① 教職大学院スタッフが携わっている校内研修充実のためのサポートに同行し、そこで展開されているサポートの具体的な内容と特徴を学ぶ

② サポートプロジェクト参加校の校内研修に参加し、各学校の特徴と教師の学びの場にみられる特徴を把握する

③ サポートプロジェクト参加校の授業研究に参加し、各学校の授業研究の特徴を理解し、授業研究の活性化に協力し、そこで実現している教師の学びの特徴等についてのリフレクションを行う

④ 各学校の校内研修充実のために有効だと考えられる手立てや工夫をチームで考え、企画立案できる専門的見識を獲得する

○対象、人数、期間、会場、日程講師

対象：いちき串木野市立市来小学校、鹿児島市立吉野東小学校、日置市立妙円寺小学校、日置市立湯田小学校の教職員、鹿児島大学教職大学院院生

人数：約 20～60 名（教職大学院院生 6 名を含む）

期間：平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月（全 28 回）

概要：各学校の校内研修ならびに授業研究の充実を目指した取組の支援ならびに企画・運営における協働サポートを目的とした。具体的には、校内研修への職員の能動的参加の促進、校内研修内での職員間の対話的学びの充実、指導案検討・模擬授業における子どもの視点からの徹底的な議論、授業研究を参加者全員の学びの機会とするための企画・運営上の工夫についてのサポートを行った。また、教職大学院院生が実習として参加することで外部参加者との協働的な学びが生起し、当該校の教員の学びの広がりや刺激が実現した。

**平成30年度
校務・校内研修充実サポートプロジェクト(開発実践実習Ⅰ)実施日**

年	月	日	曜日	研修の時間帯 (実習集合時間)	場所	サポート 教員	サポートならびに実習の概要
2018	4	23	月	15:20～16:45 (14:50集合)	妙円寺小学校	高谷	研究計画の提案とサポートプロジェクトの説明 校内研修のデザインに関する講話
2018	5	1	火	16:05～16:45 (実習なし)	吉野東小学校	高谷	研究推進委員会への参加
2018	5	7	月	15:15～16:45 (14:50集合)	市来小学校	高谷	研修の方向性の確認を主とした理論研修への参加
2018	5	21	月	15:20～16:45 (14:50集合)	妙円寺小学校	高谷	研修内容の共通理解を主とした理論研修への参加
2018	5	28	月	15:15～16:45 (14:50集合)	湯田小学校	高谷	指導案検討への参加
2018	6	4	月	14:10～16:45 (13:40集合)	吉野東小学校	高谷・山口	第1回授業研究への参加
2018	6	11	月	15:15～16:45 (14:55集合)	湯田小学校	高谷	第1回授業研究への参加
2018	6	18	月	14:00～16:45 (実習なし)	市来小学校	高谷	第1回授業研究への参加
2018	6	25	月	14:10～16:45 (実習なし)	湯田小学校	廣瀬・下古立	第1回授業研究への参加
2018	6	25	月	14:15～16:45 (13:45集合)	妙円寺小学校	高谷・山口	第1回授業研究への参加
2018	7	2	月	15:20～16:45 (14:50集合)	市来小学校	高谷・山口	理論研修への参加
2018	7	23	月	13:30～15:00 (13:10集合)	妙円寺小学校	高谷・山口	理論研修への参加
2018	8	1	水	13:00～14:30 (実習なし)	吉野東小学校	高谷	テーマ研修全体会への参加
2018	8	21	火	15:15～16:45 (14:50集合)	湯田小学校	高谷	1学期のふり振り返りへの参加 講話
2018	8	21	火	13:00～15:00 (実習なし)	吉野東小学校	山口	小中連携研修会
2018	8	21	火	13:30～15:00 (13:10集合)	市来小学校	山口・山元	実践レポート交流研修会への参加
2018	8	31	金	09:00～10:30 (08:40集合)	湯田小学校	高谷	指導案検討への参加
2018	10	22	月	14:15～16:45 (実習なし)	湯田小学校	高谷	第2回授業研究への参加
2018	11	1	木	16:05～16:45 (実習なし)	吉野東小学校	高谷	研究推進委員会への参加
2018	11	5	月	14:00～16:45 (13:40集合)	市来小学校	高谷	第2回授業研究前半への参加
2018	11	5	月	14:15～16:45 (13:50集合)	妙円寺小学校	山口・原之園・ 下古立	第4回授業研究への参加
2018	11	19	月	15:15～16:45 (14:40集合)	湯田小学校	高谷	2学期のふり振り返りの回への参加 講話
2018	11	19	月	14:00～16:45 (実習なし)	吉野東小学校	山口	第2回授業研究への参加
2018	11	26	月	15:20～16:45 (14:50集合)	市来小学校	高谷	第2回授業研究後半への参加
2018	11	26	月	14:15～16:45 (実習なし)	妙円寺小学校	山口・原之園・ 下古立	第6回授業研究への参加
2018	12	25	火	10:35～12:05 (実習なし)	吉野東小学校	高谷	次年度研究計画検討への参加
2019	1	28	月	15:15～16:45 (14:55集合)	市来小学校	高谷	実践レポート交流研修会への参加
2019	2	4	月	14:15～16:45 (実習なし)	妙円寺小学校	高谷	授業研究への参加

③ 小中一貫教育サポートプロジェクト

○研修の背景やねらい

2019年度に「義務教育学校 東郷学園」として開校することが決定している東郷小学校及び東郷中学校において、9年間を見通した教育課程の編成、コミュニティー・スクールを柱とし

た地域との連携の在り方等について、どのように小・中教員が協働的に開発していくのか、実習を通じた研修をつまさせることをねらいとしている。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

対象：薩摩川内市立東郷小学校、東郷中学校の教職員、鹿児島大学教職大学院院生

人数：約 40 名（教職大学院院生 5 名を含む）

会場：薩摩川内市立東郷中学校、東郷小学校

日程：平成 30 年 4 月～平成 31 年 2 月（全 10 回）

①4/23(4 時間)、②6/19(2 時間)、③7/3(8 時間)、④8/1(4 時間)、⑤8/22(4 時間)、⑥10/13(4 時間)、⑦11/9(8 時間)、⑧11/22(8 時間)、⑨2/13(5 時間)、⑩2/19 (3 時間)

講師：鹿児島大学教職大学院 教員（7 名）

○各研修（実習）項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

・何を配置したか

- ① 東郷小学校及び東郷中学校の合同研修会
- ② 小 5・6・中 1 の合同学習（地域と連携した総合的な学習の時間）
- ③ 東郷小学校及び東郷中学校の学校長の講話

・どの程度配置したか

- ① ……16 時間/50 時間
- ② ……33 時間/50 時間
- ③ ……1 時間/50 時間

・配置の考え方

①については、1 回当たりの時間数が少ないが、10 回中 5 回の機会を設けることで、一年間かけて学校がどのように変容していったかを探究させる目的があった。

②については、一日かけて子供たちと触れ合い、小中一貫教育の成果と課題を、授業に参加することを通して探究させる目的があった。

③については、合同研修会前後に校長室へ訪問し、実習中に生じた疑問等について、大学教員を交えた講話を聴く機会を確保する目的があった。

○各研修（実習）項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修（実習）項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
東郷小学校及び東郷中学校の合同研修会	16 時間	小中教員による協働的なカリキュラム開発	・実施形態・・・協議 ・実施方法及び内容
			4/23 教育課程部会 全体会 ・今後の推進計画について 大学教員による講義 ・カリキュラム作成上の留意点
			6/19 義務教育学校へ向けた全体会運営委員会 ・推進計画及び進捗状況について
			8/1 教育課程部会 全体会・各部会 ・推進計画及び進捗状況について
			8/22 教育課程部会 全体会・各部会 ・推進計画及び進捗状況について
2/19 教育課程部会 全体会・各部会 ・今年度の成果と課題について			

小 5・6・中 1 の合同学習	33 時間	小中一貫 教育の実際	<ul style="list-style-type: none"> ・実施形態・・・授業参加及び参観 ・実施方法及び内容 	
			7/3	中期（小 5・小 6・中 1）交流学習「T OGOとわたし」 <ul style="list-style-type: none"> ・小学校区ごとの縦割り班編成を行 い、テーマ別の追究活動を行う。この 活動に、院生も各班に分かれて参加。
			10/13	中期の児童生徒と地域との交流 <ul style="list-style-type: none"> ・「ふるさと東郷の“これから”につ いて」に語り合う、地域とのシンポジ ウムを参観。
			11/9	中期（小 5・小 6・中 1）交流学習「T OGOとわたし」 <ul style="list-style-type: none"> ・小学校区ごとの縦割り班編成を行 い、テーマ別の追究活動を行う。この 活動に、院生も各班に分かれて参加。
			11/22	中期（小 5・小 6・中 1）交流学習「T OGOとわたし」 <ul style="list-style-type: none"> ・1年間の活動内容について、縦割り 班で発表し合う活動に参加。
			2/13	薩摩川内市川内南中学校区小中一貫教 育研究公開 <ul style="list-style-type: none"> ・小中の教師がティームティーチング 形式で行う、理科・算数・総合的な学 習の時間の授業を参観し、東郷中学校 区の活動と比較し検証。
東郷小学校及 び東郷中学校 の学校長の講 話	1 時間	実習中に生 じた疑問等 についての 解消	<ul style="list-style-type: none"> ・実施形態・・・講義 ・実施方法及び内容 	
			4/23	義務教育学校に向けた、これまでの経 緯について
			6/19	義務教育学校への職員・地域の思いに ついて
			8/1	義務教育学校へ向けた管理職の役割に ついて
			8/22	来年度の見通しについて
			2/19	今年度の成果と課題について

○実施上の留意事項

・鹿児島大学から東郷小学校・中学校まで、四輪で約 1 時間かかる。移動等に関して不測の事態が起こらないよう、連絡体制の整備・複数教員による引率・ゆとりを持った移動時間等、学校管理職・大学教員・院生との連携を密に行ってきた。

○研修（実習）の評価方法、評価結果

・評価の方法

院生に毎回、レポートを作成させ、デジタルポートフォリオとしてアップさせた。

大学教員は、その全てにコメントを返すことで、小中一貫教育に対する認識・学校運営参画意識・地域との連携の在り方等について、院生自身がどのように高まってきたかを省察させ、その結果を基に評価した。

【毎回のレポート例（一部抜粋）】

1 訪問先及び日時

- ・ 訪問先 薩摩川内市立東郷小学校
- ・ 平成 30 年 7 月 3 日(火) 8:30~16:30(8 時間) 中期交流学习

2 探究課題及び対応策

(1) 東郷小、中学校では、中期課程においてどのような児童・生徒の交流学习が行われ、教師や地域はどのように関わっているか。

私は斧淵地域の中期交流学习の様子を見学した。子供たちは東郷地域の伝統文化を一生懸命学んでいる姿が見られた。教師は、交流学习を行うにあたり、小中学校で事前の打ち合わせを重ね、子供たちに身に付けさせたい資質・能力を明らかにした上で、学習活動と地域の人材をつないだりする役割を果たしていた。地域の方は、東郷小中学校を地域の学校として貴重な存在であると考え、積極的に協力する姿が見られた。課題として、交流の時間の確保があげられたが、義務教育学校の開校による解決できる示唆が得られた。

斧淵地域では、東郷地域に 17 世紀頃から伝わる「東郷文弥節人形浄瑠璃」の体験学習と、地域の史跡をめぐるフィールドワークの学習を分かれて行っていた。子供たちは、中期 3 年間の間で 3 地域の学習を行えるように計画が組まれており、自身の出身以外の地域の学習も行えるように工夫されていた。

【写真 1】小中学生がペアになり、人形遣いの練習

地域からは、「東郷人形浄瑠璃振興会」の方が 4 名指導に来られていた。基礎練習をはじめ、人形遣いの手技や作法をていねいに教えていた。昼食を地域の方と一緒に話しながら取らせていただいた。そこでは、人形浄瑠璃の後継者がいなかったり、演目数の関係上なかなか公演が広がりにくかったりするという課題や悩みを教えていただいた。そうした中で小中学生に人形浄瑠璃を教えに来ることは、単に後継者育成という観点よりも、地域の伝統芸能の良さや歴史を知ってほしいという思いからであった。

「東郷文弥節人形浄瑠璃」について調べてみると、17 世紀後半に上方で流行した文弥節の系統に属し、人形浄瑠璃創始期のいわゆる古浄瑠璃の面影を伝える貴重な芸能であるが、明治以降は戦争や後継者不足から幾度も伝承が途絶えているという複雑な歴史をたどっていることが分かった。地域の方々の思いや努力に支えられて、伝統文化の学習が成り立っていることを感じた。(中略)

3 実習の感想(考察)

中期交流学习の合間に、小学校教務主任と東郷学園開校に向けた思いや課題について聞き取りを行うことができた。そこから、来年度の東郷学園開校に向けて、主体的に課題を解決しようとするミドルリーダーの姿勢を見ることができた。一方で、小中学校の文化や職員による意識の差を小さくするための調整に大きな課題を感じていることが分かった。

教務主任は、昨年度先進校視察に行ったことで、具体的な学校のイメージを持つことができ、開校する学校やそこで学ぶ子供たちの姿を想像しながら、さまざまなアイデアを具体化していく作業はとても楽しいと語っていた。しかし、部会や委員会が始まると、小中学校や職員による



【写真 3】練習後の振り返りをポートフォリオに綴っている様子

認識の違いが大きく、なかなかアイデアが具現化しない状況であると語っていた。どこか他人任せになっていたり、「今まで通りでいいのではないか」と発言したりする職員のメンタルモデルをいかに変革していくかが課題であると感じた。新設校立ち上げの準備は、創造性を発揮できる一方で、職員間の調整の労力も大きいと感じた。

東郷小、中学校では昨年度から、同じ体育服を購入するようになったそうである。実習中にある職員が「後ろから見ると、小学生も中学生の分からないね」と話していた。まさに、小中学校が統合するとは、小学生と中学生の垣根を取り払うことであり、職員の意識変革が求められると思う。教職大学院のカリキュラムで小中一貫校の様子を参観させてもらっているの、そこでの子供たちの学びを伝えることで、東郷学園開校に向けての課題解決につなげていきたいと思う。

○研修（実習）実施上の課題

小中一貫教育に関して、東郷小学校・中学校は、約 10 年間の蓄積がある。人事異動で配属されたばかりの教員も、市教委提供のガイドブック等で、概要をつかんだうえで小中一貫教育の実践に取り組んでいる。院生が参観する上で、基礎的な知識・理解を補填するために、教職大学院の講義の中で講義等を行うことが肝要である。

④ 生徒指導サポートプロジェクト

○研修の背景やねらい

生徒指導における喫緊にして重要な課題として、不登校がある。不登校状態にある児童生徒の理解と再登校支援のあり方は、机上で学ぶだけでなく、具体的な実践や事例に数多く向きあうことによって身につくものである。そこで、本研修では、①教育支援センター（適応指導教室）における不登校児童生徒との交流（10 時間）と②中学校における不登校事例検討会（3 時間）を研修の場とすることにした。すなわち、本研修のねらいは、不登校児童生徒の状況やニーズをどのように個別のかつ共感的に把握していくのか、さらに再登校支援の方略をさまざまな関係者とどのように協働的に組み立てていくことかについて、実習を通して研鑽を深めることである。

○対象、人数、期間、会場、日程講師

教育支援センターにおける不登校児童生徒との交流を通じた研修

- ・対象：鹿児島大学教職大学院生
- ・人数：16 名（現職派遣院生 10 名、学卒院生 6 名）
- ・会場：いちき串木野市教育支援センター（市来地域公民館内）
- ・日程：事前指導（1 時間）…第 1～2 班 8 月 24 日、第 3～4 班 10 月 16 日
交流（9 時間；1 回 3 時間）…第 1 班 9 月 18 日・9 月 20 日・9 月 21 日
第 2 班 9 月 25 日・10 月 9 日・10 月 16 日
第 3 班 11 月 5 日・11 月 12 日・11 月 19 日
第 4 班 12 月 3 日・12 月 10 日・12 月 17 日

1 班（4 名で構成）あたり合計 10 時間（全体でのべ 38 時間）

- ・講師 鹿児島大学教職大学院教員（4 名）

中学校における継続的な不登校事例検討会を通じた研修

- ・対象：南九州市立別府中学校教職員
- ・人数：10 名
- ・会場：南九州市立別府中学校
- ・日程：計 3 回（第 1 回 7/9（1 時間）、第 2 回 12/10（1 時間）、第 3 回 3 月予定（1 時間））

- ・講師 鹿児島大学教職大学院教員（1名）

○各研修（実習）項目の配置の考え方（何をどの程度配置すべきと考えたか）

①教育支援センターにおける不登校児童生徒との交流を通じた研修

- ・何を配置したか：次のA)～E)を配置した

A) 事前指導

B) 教育支援センター通級生の学習支援

C) 教育支援センター通級生の対人関係力づくり支援

- ・構成的グループエンカウンター等のグループアプローチを用いた介入

- ・自由な会話による個別アプローチを用いた介入

D) 講師から教育支援センター指導員へのスーパービジョンの陪席

E) 教育支援センター指導員や教育支援センター担当指導主事からの講話

・どの程度配置したか：1班あたり10時間で、事前指導1時間に教育支援センター内における体験9時間（1日3時間×3日間）という構成である。上述のA)～E)についての時間配分は次のとおり。実際にはこの内容について4班分を行った。

A) 1時間/10時間、B) 3時間/10時間、C) 5時間/10時間、D) 0.5時間/10時間

E) 0.5時間/10時間

- ・配置の考え方：上述のA)～E)のねらいは次のとおり

A) 事前指導は、通級生に関わる際の諸注意や心構え、教育支援センターの意義と仕組みについて取りあげた。特に、受容的・共感的な関与の重要性と共にプライバシーへの配慮や守秘義務について説明した。

B) 教育支援センター通級生の学習支援では、個々の通級生の習熟度や学習へのモチベーションを関与しながら把握し、個別の学習支援を展開した。その際、指導員の関わり方および指導員同士の連携の仕方の観察や、指導員を研修者がいかにサポートできるかの観点も重視した。

C) 教育支援センター通級生の対人関係力づくり支援では、①構成的グループエンカウンター等のグループアプローチを用いた介入と②自由な会話による個別アプローチを用いた介入を配置した。①では、第1日目の訪問時には指導員が日常的に行っているグループ活動を研修者も通級生と一緒に取り組んだ。さらに第2日目と第3日目は、研修者が1日目の活動を参考にしつつ、研修生同士で通級生の実態にあわせた活動プログラムを企画し実施した。②では、指導員による通級生との関わりの観察や通級生が綴った日誌の内容、教育支援センター内に掲示された作品等を踏まえつつ、各通級生の個性を推測しながら、フリートークを用いた関与をした。その際、じっくりと観察と関与をするため、多くの通級生と関わるよりは、1日あたり1～2名にとどめるようにした（但し、次の回ではなるべく異なる通級生を相手にするように指導した）。

D) 講師から教育支援センター指導員へのスーパービジョンの陪席では、講師（スクールカウンセラー経験の長い臨床心理士でもある教員）が事前に個別面談した通級生について1人ずつとりあげて、その心理状態や支援策について講師が見立てた内容を伝え、講師と指導員が協議する様子を研修生が観察した。臨床心理の専門家と指導員のそれぞれの専門性の違いとすりあわせの重要性の理解を目指した。

E) 教育支援センター指導員や教育支援センター担当指導主事との意見交換では、どのような意図や工夫をもって通級生と関わり教育支援センターを運営しているかについて語っていただいた。

②中学校における継続的な不登校事例検討会を通じた研修

- ・何を配置したか：次のA)～C)を配置した

- A) 第1回事例検討会
- B) 第2回事例検討会
- C) 第3回事例検討会

・どの程度配置したか：1回1時間を3回

・配置の考え方：1学期に1回のペースで、主に合計5件程度の長期不登校事例と不登校傾向事例について追跡し、継続的な検討をした。

○各研修（実習）項目の内容、実施形態（講義・演習・協議等）、時間数、使用教材、進め方

研修（実習）項目	時間数	目的	内容、形態、使用教材、進め方等
教育支援センターにおける不登校児童生徒との交流を通じた研修	10時間	不登校児童生徒の個別的理解と協働的な支援方略の探究	<ul style="list-style-type: none"> ・実施形態・・・大学における事前指導と教育支援センターにおける実習 ・実施方法及び内容
			事前指導 <ul style="list-style-type: none"> <テーマ：諸注意と心構え> ・教育支援センターの意義と仕組み ・受容的・共感的な関与の重要性 ・プライバシーへの配慮と守秘義務の徹底 ・通級生との関わり方のヒント ・通級生むけ自己紹介シートの作成 ・振り返りのポイント
			第1日目 <ul style="list-style-type: none"> <テーマ：知る・知ってもらおう> ・自己紹介 ・通級生の学習状況の把握や指導員の教え方を観察しつつ、学習支援に加わる ・指導員と共に通級生とのフリートークの中で近況や関心事を聴く ・指導員が準備したグループ活動を通級生と共に体験する ・ふりかえり
			第2日目 <ul style="list-style-type: none"> <テーマ：関わる> ・学習支援をする ・通級生とのフリートークをする ・研修生たちで企画したグループ活動を実施する ・指導員へのスーパービジョンの陪席によって、通級生の心理をさらに深く理解する（※可能な場合のみ実施） ・ふりかえり
			第3日目 <ul style="list-style-type: none"> <テーマ：さらに関わる> ・学習支援を深める ・通級生とのフリートークを深める ・第2日目の通級生の反応を踏まえ

				て、研修生たちで企画したグループ活動を実施する ・ 指導員や指導主事との意見交換 （※可能な場合のみ実施） ・ ふりかえり
中学校における継続的な不登校事例検討会を通じた研修	3時間	不登校事例の継続的検討	<ul style="list-style-type: none"> ・ 実施形態・・・事例検討会 ・ 実施方法及び内容 	
			1回目 (1学期)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 校内の不登校事例を概観 ・ 重点的に検討すべき事例の特定 ・ 事例の理解と対応策についての研修者による討議 ・ 講師による分析とそれを踏まえた全員での討議
			2回目 (2学期)	<ul style="list-style-type: none"> ・ 不登校の段階を踏まえたアセスメント ・ 不登校段階に応じた事例の理解と対応策についての研修者による討議 ・ 講師による分析とそれを踏まえた全員での討議
			3回目 (3学期) ※計画中	<ul style="list-style-type: none"> ・ 事例の理解と対応策についての研修者による討議 ・ 講師による分析とそれを踏まえた全員での討議 ・ 来年度への重点引継事項の整理

○実施上の留意事項

- ・ 双方の研修とも、対象となる児童生徒のプライバシーへの配慮や守秘義務については徹底した。
- ・ 教育支援センターにおける研修では、通級生に不安や緊張を感じさせないように、研修者によるメモ等の記録は禁止し、自然なコミュニケーションを心掛けさせた。また、鹿児島大学からいちき串木野市教育支援センターまでの道のりは 30km 以上もあるため、移動等に関して不測の事態が起こらないよう、連絡体制の整備・ゆとりを持った移動時間等、教育委員会・大学教員・院生との連携を密に行った。

○研修（実習）の評価方法、評価結果

- ・ 教育支援センターにおける研修では、毎回、観点を定めたレポートを提出させ、さらに大学教員がその全てにコメントを返すことで省察を促し、次回の研修に送り出した。3回の実習を経た後で、再登校支援のあり方について総合的な省察レポートを課し、研修者がどのように理解を深めたかを評価した。

○研修（実習）実施上の課題

- ・ 教育支援センターにおける研修では、少人数のスタッフで手厚い支援をしているため多忙であり、スーパービジョン陪席や指導員・指導主事との意見交換の時間を充分にとることができない回もあった。グループ活動では、スポーツを取り入れる案もあったが施設の都合上できないこともあった（体育館の予約を早めにする必要があった）。また、教職大学院におけ

る生徒指導・教育相談の講義が第4ターム（12月以降）に集中している関係で、実習で得た体験を理論的側面と結びつけて考える機会が少なかった点も課題である。

3 連携による研修についての考察

（連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点、今後の課題等）

本研修プログラム開発事業では、4つのサポートプロジェクトを企画し、それぞれ各連携での教員研修や、研究公開での研究授業及び授業研究の企画・実施等に教職大学院のスタッフが継続的に関与できた。また、現職教員を含む教職大学院院生が自校の実践に活かすため、実習として位置づけ、継続的な参与観察を行うことができた。

連携校側から見た場合、現時点では、年間の教員研修に位置づけられている研修に大学教員が継続的に入ってきているとしか映っていないかもしれない。そういう点で、研修プログラムとしての認識はまだ低いように思われる。しかし、各学校等の年間教員研修に外部でかつ専門性に基いた示唆や評価が入ることで、教員研修を客観的に捉え、何が自校の課題なのか、校内研修を通して、教職キャリアの中で今の自分はどうのどのような力をつけたらよいのかを省察することが可能となろう。そうしたことを今後、可視化する手立てを加えることで、研修プログラムとしてリファインできるであろう。

また、各都道府県は、育成指標を策定している。まだ、この育成指標を踏まえ、教職キャリアを通じて行われる研修を体系化させている都道府県は少ない。今後、研修プログラムをさらに開発していく中で、OJTとして行われる校内研修を明確に位置づけていくことは、働き方改革が強く求められている学校において欠かせない取組であろう。そうした意味で、学校サポートプロジェクトを使った研修プログラム開発は、今後の教員研修の体系化の一助となろう。

以下に、各サポートプロジェクトの成果と課題をまとめ、次年度以降の取組に繋げたいと考える。

①学びづくりサポートプロジェクト

（1）連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点

南さつま市では平成27年度から平成30年度まで文部科学省「道徳教育総合支援事業」の委託研究を行っている。平成30年度の南さつま市の道徳の研究もこの事業の一環として進めている。したがって4回の学校サポートプロジェクトに基づく実習では、南さつま市が取り組んでいる道徳研究の内容を知ることができた点に大きな成果があると考えている。

特に4回の研修会はすべて同じテーマで実践されていた点が特筆すべき点である。このことにより、院生は同じテーマの研修に4回参加したことになる。結果的に、同じテーマを4回繰り返したことになり、院生にとっては内容の理解と知識の定着が深まったと言える。通常、1回限りの参加では、その内容の理解は不十分なままになりがちである。この点に本プロジェクトの最大の意義があったと言える。

（2）プロジェクトの課題について

本プロジェクトにもとづく実習に参加するに際して、院生は加世田中学校および南さつま市より事前に当日の資料を受け取り、予習をして研修に臨んだ。これはあくまでも受身的な学びであると言える。院生が自分自身で学びのテーマを設定したわけではない。与えられたテーマを学んだという形である。

今後は、本プロジェクトの実習に臨むに際して、院生に自らテーマを設定してもらう必要があると言える。本プロジェクトでは道徳の内容であったので、院生が道徳についての自分自身のテーマを設定し、実習が自分のテーマとどのような関連があり、どう役立ったのか、に

についての考察が必要であろう。

そのためには、事前に実習先の学校の研修計画を把握しておく必要がある。そして実習先の研修計画に関連したテーマを院生が設定しておく必要がある。本プロジェクトへの協力校にはこうした点の依頼をしておく必要がある。

② 校務・校内研修サポートプロジェクト

(1) 連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点

各学校の事情・状況に応じた校内研修充実のためのサポートを実現することができた。特に、各学校からは、「院生が外部参加者として参加したことが自校の教員にとってとても良い刺激になった」、「外部参加者がいることで自校の教員だけでは実現し難い学びの広がりや深まりがあった」旨が報告された。また、教職大学院スタッフによる自校の状況や事情にあわせた具体的なサポートによって、自分たちの取り組みに自信を持ったり、教員集団で取り組みの理念や意義を共通理解しやすかったりした点も報告された。中でも、教職大学院の研究者教員による自校の取り組みの専門的な価値付けや意義づけ、進もうとしている方向性の後押しと支援が高く評価された。学校と教職大学院スタッフが協働で校内研修を開発していくスタイルが、管理職や研修係にとって大きな支えとなるとともに、研修に対する教員の充実感や成長実感の高まりに結実した。

院生は、各学校の校内研修に外部参加者として加わり当該校の教員と共に学ぶとともに、大学に戻って参加して来た校内研修の内容・実施方法についてのリフレクションを行った。ここでは、実際に参加して来た研修でどのような教師の学びが生起していたかを考察したり、教職大学院での専門的な学習内容を活かして研修のデザインを行ったりする活動に取り組んだ。

それらを通して、校内研修の充実に向けた取り組みを行っている学校の組織的な研究活動の具体的な内容と、各学校の状況に応じた研修デザインの必要性の理解を深めた。また、教師の学びがどのような条件下で成立し得るのか、学びを妨げる要因は何かといった、教師の成長と校内研修の関係に関する専門的理解を深めるとともに、各学校の状況に応じた教師の学びの場をデザインしたりマネジメントしたりする方法についての実践的理解を深めた。

(2) プロジェクトの課題について

各学校の校内研修のデザインとマネジメントをサポートする目的は高いレベルで達成されたと考えられるが、学校側が期待する専門的なサポート内容と一致した教職大学院スタッフの確保には課題が残された。また、教職大学院の研究者教員が各学校をサポートしている姿に徒弟的に学ぶ機会は充実しているが、院生が実際に校内研修のデザインやマネジメントのサポートにどこまで関わることができるかについては、まだ試行錯誤が続いている。

今後、学校側のニーズが多様化・増加した際に、現在の限られた教職大学院スタッフの人員でどこまでそれに応じることができるか、どの範囲までを担うことにするかといった、サポート範囲の検討が、現実的な課題として引き継がれることとなった。

③ 小中一貫教育サポートプロジェクト

(1) 連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点

小中一貫教育は、薩摩川内市全体で実施されている。したがって、鹿児島大学教職大学院との連携を推進・維持するためには、学校とではなく、市教委との連携が大切である。

(2) プロジェクトの課題について

次年度は市教委との連携により、実習の場として、市教委主催の「小中一貫教育運営協議会」「薩摩川内市小中一貫教育全体会」への参加等についても、検討していきたい。

④ 生徒指導サポートプロジェクト

(1) 連携を推進・維持するための要点、連携により得られる利点

教育支援センターを管轄する教育委員会の担当部署や事例検討会を実施した中学校とは、数回にわたり綿密な打合せを行った。また、教育支援センターでは、通級生に過度な負担を掛けないことを最優先に、実習を計画し実施した。スーパービジョン陪席や指導員・指導主事との意見交換の時間を十分に確保できない回もあった一方で、通級生に会うために来所した所属校の管理職や担任教師、スクールソーシャルワーカー、スクールカウンセラー等から研修者がお話を聴けたこともあった。これは想定を超える収穫ではあったが、事前に教育委員会が市内の学校管理職や関係者に実習の趣旨を周知してくれてあったことが大きい。

指導員や指導主事からは、通級生が研修者の来訪を毎回楽しみにしていたことや、研修者とのコミュニケーションや学習の場面で予想もしなかった健康的な表情や反応があり今後の関わりのヒントになったとのフィードバックがあった。また、実習日の大半が月曜日の設定だったため、週初めで気分がふさがちな通級生に負担にならないか危惧もしたが、結果としては、研修者が実習に訪れることで、逆に月曜日の教育支援センターの雰囲気明るくなり、通級生が楽しみに通ってくる傾向が出てきたとのことである。このように実習先と研修者の双方に利点になるような活動を、より増やしていく必要がある。

(2) プロジェクトの課題について

課題としては、不登校をテーマにしつつも、教育支援センターを舞台にした研修と中学校を舞台にした研修に別個に分かれてしまっている点が挙げられる。理想としては、通級生の所属している学校における、その通級生の事例を含めた事例検討会を実施できるとよいだろう。



いちき串木野市教育支援センター
(いちき地域公民館内)



南九州市立別府中学校

IV その他

【キーワード】 学校サポートプロジェクト、学びづくり、校務・校内研修、小中一貫教育、生徒指導、研究授業、授業研究、義務教育学校、適応指導教室、教職大学院

【人数規模】 (補足事項 現地教員及び教職大学院院生の合計数)

①学びづくりサポートプロジェクト

A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

②校務・校内研修サポートプロジェクト

A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

③小中一貫教育サポートプロジェクト

A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

④生徒指導サポートプロジェクト(教育支援センター)

A. 10名未満 B. 11～20名 C. 21～50名 D. 51名以上

【研修日数(回数)】 (補足事項 教職大学院の学生にとっての研修回数は11回以上)

①学びづくりサポートプロジェクト(道徳4回、国語12回)

A. 1日以内 (1回) B. 2～3日 (2～3回) C. 4～10日 (4～10回) D. 11日以上 (11回以上)

②校務・校内研修サポートプロジェクト(各学校)

A. 1日以内 (1回) B. 2～3日 (2～3回) C. 4～10日 (4～10回) D. 11日以上 (11回以上)

③小中一貫教育サポートプロジェクト

A. 1日以内 (1回) B. 2～3日 (2～3回) C. 4～10日 (4～10回) D. 11日以上 (11回以上)

④生徒指導サポートプロジェクト(教育支援センター)

A. 1日以内 (1回) B. 2～3日 (2～3回) C. 4～10日 (4～10回) D. 11日以上 (11回以上)

【担当者連絡先】**●実施者** ※申請する大学名又は教育委員会名を記載すること

実施者名	鹿児島大学大学院教育学研究科学校教育実践高度化専攻（教職大学院）	
所在地	〒890-0065 鹿児島県鹿児島市郡元1丁目20-6	
事務担当者	所属・職名	教育学研究科学校教育実践高度化専攻・専攻長
	氏名（ふりがな）	有倉 巳幸（ゆうくら みゆき）
	事務連絡等送付先	同上
	TEL/FAX	099-285-7923
	E-mail	dpte2@edu.kagoshima-u.ac.jp

●連携機関 ※共同で実施する機関名を記載すること

連携機関名	鹿児島県教育委員会	
所在地	〒890-8577 鹿児島市鴨池新町10-1	
事務担当者	所属・職名	義務教育課・課長
	氏名（ふりがな）	山本 悟（やまもと さとる）
	事務連絡等送付先	同上
	TEL/FAX	099-286-5281
	E-mail	kikakuseito@pref.kagoshima.lg.jp
